

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2017年
No. 76
2017年7月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会
THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 中山博邦
© JASE. 2017 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

日本の学校教育とジェンダー・セクシュアリティの形成 .. 1	多様な性のゆくえ④..... 13
性教育の現場を訪ねて④..... 10	今月のブックガイド..... 14
Dr.上村茂仁の性の悩みクリニック⑩..... 12	JASEインフォメーション..... 15

日本の学校教育と ジェンダー・セクシュアリティの形成

橋本紀子^a、艮香織^b、森岡真梨^a、田中和江^a、茂木輝順^a、田代美江子^c、
井上恵美子^d、池谷壽夫^e、関口久志^f、丸井淑美^g、澤村文香^h

(a 女子栄養大学栄養科学研究所、b 宇都宮大学、c 埼玉大学、d フェリス女学院大学、
e 了徳寺大学、f 京都教育大学、g 九州女子短期大学、h 所沢市教育委員会)

要 旨

本稿の目的は、戦後日本の青少年のジェンダー平等意識、セクシュアリティはどのように変化してきたか、そこに学校教育が関わっていたか、否かを検討することである。まず、学習指導要領の変遷と生まれた年度を対応させた世代区別に調査対象者を分け、半構造化面接法によるインタビューを行った。

ここでは高校時代の体験や意見を聞いている。本稿では中学、高校で受けた性教育、婚前交渉観、結婚・離婚観、性役割観を取り上げた。調査対象者は 53 名(女 30 名、男 23 名)である。各世代の特徴はその世代に対応する学習指導要領や関連教科書(保健、家庭科)の分析と関連付けながら行われ、学習指導要領や

教科書に含まれるメッセージと世代ごとに語られた価値観との間の共通性と相違性が確認された。その結果、人間の性に関する生理学的な側面も、関係性や性規範などについても男子は、エイズパニック後の第4世代、家庭科が男女共修となる第5世代になるまで教科書からの直接的な影響は少ないことや、女子のみ必修となった時期の女子には、家庭科教科書の伝える知識や情報は、性行動の抑制に何らかの影響を与えていた可能性があることなどが示唆された。

研究背景

日本では、近年、性行動に全く縁のない若者と比較早い年齢で性行動を体験する若者に分極化が進んでいることが報告されている(日本性教育協会 2013)。

その調査によれば、1990年代から2005年にかけて上昇傾向にあった高校生、大学生のデート、キス、性交等の経験率が2011年には大幅に減少している。

また、この調査では初キス経験・初交経験時に主導権をもった女子はかなり少数で、性行動における男子主導というジェンダー規範は根強く残っていることが示されている。このような規範が、「奥手な男子」にはプレッシャーとなり、「セックス嫌い」の若者の増加につながっているという指摘もある(北村2011)。

これらの問題の背景には、対人関係スキルの未発達や自己肯定感や有用感の低さに起因した自己や他者の性に対する否定的な感情あるいは若者の実態やニーズに即した性教育が学校でも家庭でも不在などのさまざまな要因が考えられる。とりわけ、日本では2002年頃より起きた性教育バッシングにより、学校における性教育は停滞、後退しており(橋本等2012)、性や生殖に関する生理学的な事実やLGBTの若者を含む人間の多様性の教育もいまだ、不十分である。これとは対照的に、国際的にはこの間、LGBTQに関する教育実践を対象にした研究が進んでおり、その方法も授業観察や教師インタビュー(Dinkins et.al., 2015)、オンライン調査(Meyer, Taylor, and Peter 2015)などのように多様化している。

文部科学省は2015年、2016年の4月に教職員向けにLGBTに係る児童生徒に対する配慮を促す通知を出した(文部科学省, 2015, 2016)ものの、道徳、保健体育などの学習指導要領は依然として異性愛主義で書かれている。日本では、学習指導要領の改訂は直ちに、検定教科書に反映するので、それを学んだ世代は、そのカリキュラムに規定される共通の文化体験をすることが考えられる。日本の高校では長いこと女子のみ必修の家庭科があり、男子にのみ柔剣道などが体育として課されていた。

筆者らは、先に述べたような、現在の日本の若者の性行動に対応するためにも、戦後日本の若者のジェンダー平等意識やセクシュアリティと学校教育との関係を明らかにする必要があると考え、異なった年齢群間の調査を進めることにした。そこでは、彼らは何を教えられ、それが意識や行動にどんな影響を与えたと認識しているかが問われる。

この目的を達成するために、まず、異なる時期に高校時代を過ごした6つの異なる世代の特徴を検討し、

さらに、それらの特徴と各世代の中学、高校の保健体育と家庭科の学習指導要領や教科書を対応させて検討する。ジェンダー平等意識や各人のセクシュアリティに影響を及ぼすのは、必ずしも、学校だけではなく、また、中学、高校だけではないが、あえて、ここに焦点をあてたのは、1989年の学習指導要領の改訂まで、中学、高校の家庭科と保健体育は性別教科であったこと、さらに、ヨーロッパ諸国と異なり、人間の性や生殖に関する事項は理科や生物ではなく、主に保健体育で取り上げられ、家庭科でも性規範や男女の関係性に係る内容が取り上げられてきたことによる。

現行教科書のジェンダー、セクシュアリティの視点からの分析は今でも、新しい手法を取り入れたりしながら国内外で継続して行われている(例えばC.C.R.Yang, 2016; 茂木2012 鶴田2012を参照)。また、時代は古いですが、自叙伝を利用してセクシュアリティの世代別変遷を明らかにした作品(Haavio-Manila, Kontula, Rotkirch, 2002)などもあげられる。こうした中で、本研究に最も大きくかかわる先行研究は、対象者へのインタビューによる振り返り調査によって、ジェンダー平等意識の形成における学校教育の影響を世代ごとに見ようとした研究(橋本等, 2013)である。ここでは、性別教科であった家庭科や体育における教育課程上の変更が、予想外に人々のジェンダー観や、実際の家事関連のスキル修得に影響を与えていたことが明らかにされている。

研究方法

まず、全国各地の高校を卒業した男女の調査対象者が機縁法¹⁾で選ばれた。次にその対象者を学習指導要領の改訂年と生まれた年度を対応させた世代区分に振り分けた。それから、高校時代の対象者のジェンダー・セクシュアリティに関係する体験や認識と当時の一般的な意見を質問するインタビューガイドを作成した。そして、区分された世代ごとにこのガイドに基づいた半構造化面接²⁾を60分程度行った。これと、並行して、それぞれの世代で出ていた学習指導要領や教科書の特徴を押さえた。

世代区分は、戦後制度への移行期にあった世代(移行期世代)と第1世代から第5世代の6グループに分けたが、本稿では、第1世代から第5世代までを分析

表 1 対象者の属性

世代	男性	女性	合計	出生年度	出身高校の所在地
第1世代	3	7	10	1940-1946	秋田、東京、新潟、山形
第2世代	6	4	10	1947-1956	北海道、青森、栃木、東京、神奈川、千葉、京都、岡山、広島、山口
第3世代	2	8	10	1957-1965	愛知、岐阜、福岡、埼玉
第4世代	6	7	13	1966-1977	群馬、千葉、埼玉、東京、
第5世代	6	4	10	1978-1986	埼玉、長野、香川

の対象とする。第1世代（1940～1946年度生れ）は、小学校1年生から新制の学校に入学した初めての世代であり、第5世代（1978～1986年度生れ）は中学・高校の性別教科が消えた後に入学した世代であった（表1参照）。

インタビュー内容がセクシュアリティに関わるものであるため、インタビュー対象者を得ることの困難が予想されたので機縁法を用いた。さらに、これは振り返り調査であるため、同級生のような仲間や経験を共有している人たちによる集団インタビュー（2～5人）を試みた。それができない場合には、個別のインタビューも併用した。したがって、個々の対象者の語りは、各世代を代表する意見というわけではないが、各世代の経験の中に垣間見える内容を提供している。

インタビュー対象者の記憶違いや明らかな間違いは当時の文書資料によって是正した。しかし、私たちの研究は社会史の視点からなされている。そこでは、近年のオーラル・ヒストリー研究の進展で強調されるようになった口述史料の意義を認め（Thompson,2000）、各人の記憶に残っている「事実」によって構成された歴史が彼らの生きられた歴史であるという立場をとっている。

インタビューガイドの主要項目

若者の性に対する規範およびジェンダー平等観、また学校内外で得た性情報についての確認のため以下の質問項目を設定した。

- ①属性（性別、出身高校等）
- ②中高で受けた性教育
- ③性情報の入手方法
- ④婚前交渉観

⑤結婚・離婚観

⑥家族、進路、労働などにみられる性役割観

などであるが、本稿では、主に②中高で受けた性教育、④婚前交渉観、結婚・離婚観、⑤性役割観について分析する。

解析方法は、上記3つの項目と対象者の語りのデータを世代ごとにマトリックスにしてその特徴を把握し、各世代の学習指導要領や教科書の特徴と対応させながらそれらのデータを考察する。

結果

1. 対象者の属性

調査対象者の属性は表1の通りである。男女比は世代ごとにばらつきがあるが、全体では男性23名、女性30名で、どの世代も両性を複数含む。出身高校は全国8ブロックにわたる。

2. 学習指導要領と教科書の特徴

保健体育科

移行期世代：1949年11月に『中等学校保健計画実施要領（試案）』が通達され、「健康教育の内容」の一つに「成熟期への到達」が示される。中学校と高校の保健科の教科書は同『要領』に準拠して作成され、「成熟期への到達」として性教育に関連する内容が示された教科書が1951年度から使用されはじめた。

第1・第2世代：中学校では1956年「中等学校保健体育科のうち保健の学習の指導について」によって、高校では1956年『高等学校保健体育科編改訂版』によって、保健の学習内容が改訂される。この改訂によ

て、中学校・高校ともに保健科教科書は、まとめて示されていた性教育に関連する内容が簡略化される。たとえば、生殖器の図が削除され、妊娠の仕組みに関する説明が簡単になるなど。

第3・第4世代：1970年代の性教育ブーム（純潔教育から性教育への転換）のさなか、1970年改訂の『高等学校学習指導要領』に準拠した1973年からの保健体育科教科書で、避妊（受胎調節）について記述されるようになり、さらに、1978年改訂の『高等学校学習指導要領』に準拠した1982年からの教科書では、避妊についての内容がさらに詳しくなる。また、1969年改訂の『中学校学習指導要領』に準拠した1972年からの中学校保健教科書には、性感染症（性病）の概要について記述される。1960年代に比べると、1970年代以降の教科書における性教育に関連する記述は増えていく。

第5世代：1980年代後半のエイズパニックを経て、1989年に『小学校学習指導要領』が改訂され、1992年から小学校5年の理科で「ヒトの発生」を扱うようになり、小学校にはそれまでなかった保健の教科書が5年から使用され始める。また、中学校では1997年から使用され始めた教科書がエイズについて掲載し、1998年の『中学校学習指導要領』の改訂で、2002年より3年生でエイズ及び性感染症について取り扱われる。

家庭科

移行期世代：1947年「学習指導要領一般編（試案）」で、家庭科が新設された。この教科は民主的家族関係に基づいた家庭や社会を築くために男女ともに学ぶ教科となったが、高校家庭科（1949年実施）の主な対象は女子であった。

第1・第2世代：1956年改訂高校学習指導要領では「女子については『家庭科』の4単位を履修させることが望ましい」とされたが、1960年の改訂では普通科女子は原則として必修となる。この改訂では「家庭一般」は家庭経営の立場、すなわち主婦の立場から学ぶものとされ、この仕事を遂行できる程度の社会的な労働に携わるべきだとされていた。中学校では1958年学習指導要領改訂（1962年施行）によって、男子は技術、女子は家庭科を履修する「技術・家庭科」が誕生する。教科書は一夫一婦制を前提とし、純潔教育

的な内容や遺伝、優生学的な記述がなされている。

第3世代：1970年高校学習指導要領改訂（1973年施行）で普通科「『家庭一般（4単位）』は、すべての女子に必修となった。

教科書では家庭経営の担い手としての女性が強調される一方で、就業女性にも言及し、労働の保育に及ぼす悪影響と同時に保育の共同化、社会化の必要性を述べる。また、妊娠・分娩の生理の内容が増加する。

第4世代：1977年の中学校学習指導要領改訂（1981年施行）で技術・家庭科の相互乗り入れが開始される。1978年高校学習指導要領改訂（1982年施行）では「家庭一般」の「男子の選択履修」が明記される。1982年度以降の教科書は女子のみの内容から共学を見越した内容に移行し始める。

第5世代：1989年の学習指導要領改訂（1994年施行）では、高校家庭科は女子のみ必修から、男女を問わず選択必修となる。中学校では1993年から技術・家庭科の男女の区別がなくなった。男女共修により、ジェンダーバイアスを問い直す内容や性に関わる内容が充実する。「青年期の愛と性」が加えられた点や、シングルペアレント、事実婚などの多様な家族のあり方が具体的に記述されるのもこの時期の特徴である。

3. インタビュー

あなたが受けた性教育はどんなものであったか？³⁾

日本では、性教育経験についての証言は、保健体育での性教育の内容に大きく関連している。こうした点から、各世代のインタビュー結果に見られる性教育体験の特徴を、保健体育の教科書の変遷との関連でまとめる。

第1に、第5世代を除いて、どの世代でも「性教育の記憶がない・あいまい」という証言が多くみられるということである。特に高校での性教育経験についてこの傾向が顕著に表れている。

高校で受けた性教育についてほんやり思い出す人も少数いるが、次のような証言がより多く語られた。「高校では体育はあったが、「保健」はやっていない（G1山形M1）」、「性教育はまったくなかった（G2神奈川M1）」、「高校では性教育はやっていない、というより、私の高校では“雨降り保健”だったから、ほとんど保健的なことはやらなかった（G3福岡F1）」、「覚えがない（G4埼玉M2）」といった証言。また性教育を受

けた記憶がある者からは「若い男の先生がしどろもどろで真っ赤になって、恥ずかしそうに話していたのを覚えている (G3 岐阜 F1)」というように、教員側に性教育への抵抗感があったことが語られていた。

しかし、中学校時代に性教育が「成熟期への到達」として示されていた第1世代では「保健の教科書で“男女の身体の仕組み”を習った (G1 秋田 F2)」という証言も見られる。また、「エイズパニック以後」にあたる第4世代に関しては、授業ではなく養護教諭から性行為のリスクや性感染症のことを聞いたという経験も見られる。さらに第5世代になると、性教育の記憶がない・あいまい」といった証言は例外的なものとなる。

第2に、1968年改定の小学校の学習指導要領において、保健指導として「初潮教育」が取り上げられた。この改定は第2世代で行われているので、それ以降、女子のみへの初経教育・月経指導についての証言が多く見られる。「生理については、小学校5年生の時、女子だけ集められて、その仕組みについて学んだ (G2 東京 F1)」、「小学校高学年で女子だけ月経の話聞いたことがある (G2 千葉 F1)」、「中学校の時、女子だけ女の先生に、生理のしくみについて聞いた (G2 山口 F1)」といったように全国的にこうした経験が多く語られている。

第3に、男子への性教育は第4世代から変化が見られる。女子が初経教育を受けている最中、男子は外で「遊んでいた」、「体育をしていた」という様子が第2、第3世代で共通して語られているように、男子への積極的な性教育は、第3世代の終わりまでほとんど見られない。第4世代でも、「男子は野放し (G4 埼玉 M3)」といった証言も見られるが、第4世代以降は、保健体育では「男の子と女の子と分かれてやったよね。中学でね (G4 群馬 F2)」というように男女別習ではあるが、同性教員からそれぞれ性教育を受けていたという経験が語られている。

第4に、男子の性教育経験が表れる第4から第5世代では、性教育の男女共修の経験が語られている。「中学で集められての一斉授業で、養護教諭が(体の仕組みについて) 教えてくれたのを、覚えている (G4 群馬 F3)」、「一番覚えているのは小学校のときの保健で、男女一緒にやったのは印象的に覚えている (G5 埼玉 M2)」といった証言がなされている。

第5に、エイズパニック後の第5世代になると、避妊や性感染症予防との関連でコンドームが具体的に扱われるようになってきた。高校の授業でコンドームの実物が扱われ、教師が「コンドームつけておかないと意図せず出ちゃうことがあるからちゃんとつける (G5 埼玉 M4)」といった発言があったこと、また、コンドームについての発言の中で、「教師がマスターベーションについて否定的ではなく語っていた (G5 埼玉 M4)」といった証言もみられた。

婚前交渉、結婚・離婚観

婚前交渉に関しては、第1、第2世代では、「当時、世間一般では認められていなかったと思う (G2 北海道 M1)」のように、婚前交渉はよくないと世間も本人も考えていた。例外的に高校生の男女交際が見られ、妊娠等で退学したと回想する者もいた (G1 新潟 M1)。

しかし農村の一部では、「子どもがその場にも、あの人は夜になると誰かと外に出て行くとかそういう噂話ばかり出る (G1 新潟 M1)」というように、大人の性規範がゆるやかで、それが世間話として扱われることもあった。

第3、第4世代の女性たちは「結婚までは、特に女性は一線を越えてはいけなかった (G3 福岡 F1)」、「(高校生の性交は) タブーで、誰も言わなかった気がする。(略) 卒業してからだろうなって思っていた (G4 群馬 F2)」のように、自分自身も、世間の常識としても、婚前交渉をすべきではないという性規範を持っていた。

しかし、「妊娠したら責任を取ればいい (G3 愛知 F3)」、「テレビドラマの影響で、そういうこともありなのかなと思った (G3 愛知 F1)」というように婚前交渉への抵抗感が薄れる者もいた。また、「性交をすることがだめとは思わないが、赤ちゃんができると人生が狂ってしまう (G4 大分 F1)」、「受験勉強を優先するため今は我慢する (G3 福岡 F1)」というように、婚前交渉がいけない理由について、倫理的な抵抗感ではなく、受験や望まない妊娠への恐れとして語られるようになる。

一方、男性をみると、「結婚するまで絶対だめという人は逆に少なかったのではないか。(G3 愛知 M1)」、「貞操観念は、社会的にも高校生の間にも強く

あったが、卒業した先輩が後輩に『男になってこい』と風俗に連れていくようなこともあった (G3 福岡 M1)」といった語が見られ、婚前交渉を肯定する空気が女性よりは強かったようである。

第5世代になると「母親は、ダメだと思っていたはず (G5 埼玉 M1)」というように、親世代の反対を感じつつも「ご自由になっていう雰囲気だった気がする (G5 埼玉 M2)」、「お付き合いをするっていうことは、そういうこと (性交) が含まれているっていう印象があった (G5 香川 F1)」というように高校生の交際に性交も含まれると捉える語りが男女ともに見られるようになった。なかには「彼がいることがステイタス (G5 長野 F1)」であり、級友の妊娠についても「その善悪についてどうこう言うことはなかった (G5 長野 F1)」と語る者もいた。

結婚について

第1世代および第2世代の一部では「お見合いで結婚するのが圧倒的に多かった (G1 秋田 F2)」、「中学時代から、親が婚約者を決めていて、高校生のときにその人と顔合わせをした (G2 千葉 F1)」と見合い結婚が多く見られた。この背景には「結婚は個人と個人の結びつきではなく、家と家とのつながりだった (G1 秋田 F3)」という考え方があったが、第2世代の終盤では「見合いはほとんど考えられていなかったと思う (G2 北海道 M1)」という語りが見られ、その後の世代では見合い結婚か恋愛結婚かという区別を重視して語る者はいなくなった。また第4世代・第5世代になると「結婚はするかもしれないけど、積極的にしようとは思っていなかった (G5 香川 M1)」というように結婚をしないという選択肢を考えていたという語りもみられるようになる。

離婚について

離婚はよくないので我慢すべきだという語りは第1～5世代を通して見られるが、離婚という選択肢がどの程度許容されるかは世代によって変化が見られた。

第1、第2世代は結婚が家同士のつながりであるという意識が強く「離婚は恥ずかしいこと、世間体が悪いことだと思われていた (G1 秋田 F3)」、「家のため、子どものために我慢することが当たり前 (G2 千葉 F1)」と離婚を恥だと考える傾向が強かった。しか

し「一般的には、世間体が悪いとはなっていたが、離婚する人には、それなりの理由があるだろうと思っていた (G1 山形 M1)」というように、世間体と個人の考えや行動は別だという考えも見られた。

第3、第4世代では「給料がとても低かったので、一人で子育てをしていく自信がなかった (G3 愛知 F2)」、「離婚をしたら生活ができないからと我慢する母の姿を見ていた (G3 愛知 F3)」というように、離婚自体への抵抗感ではなくその後の現実的な生活を考えたうえでの判断について語られるようになった。第5世代では多くが「高校時代は、結婚したら基本的には離婚はしないものだと思っていた (G5 埼玉 M4)」と考えているが、離婚に対する否定的な価値観からではなく、将来設計として離婚までを想定していなかったという語が多い。また「自分も離婚する可能性があると高校時代に思っていた (G5 香川 F3)」というように、離婚の可能性を考えていた者もいる。

進路と労働にみられる性役割観

第1世代では女性の進路として大学進学は重視されていなかったことが「当時は、短大をでていることは、お見合いの相手を捜すのに、支障を来した。男性も高卒で働いていた時代だから高卒でよかった (G1 秋田 F3)」という発言にも表れており、とりわけ農村部にその傾向があった。さらに、「高校の頃は、女性が家事・育児をやるという伝統的な性役割に疑問も持たなかった (G1 山形 M1)」という考え方も見られた。女性に高等教育は必要がないという考え方は、第2世代の語りにも「私の叔父は、女子は短大で十分と4年制大学に行くことに反対した (G2 山口 F1)」のように見られる。

一方、進学をした女子の語りには「母子家庭で母が苦勞するのを見て、資格取得のために大学進学をめざした (G1 新潟 F1)」という者や、専業主婦の母に経済力がなく父に従うのを見て、「私自身は卒業後、進学して自分で食べていって思っていた (G1 東京 F2)」という者もある。また、進学の夢が叶わなかった母親が娘の進学を応援していたと言う次のような発言も見られる。「親が男尊女卑の社会で生きてきて苦勞をしてきている分、子どもには女の子でも、仕事をしたほうがいいよっていうのがありましたね。そういう生き方を応援してくれていた (G1 東京 F1)」。

第2世代になると、女性の賃金労働を肯定的に捉える語りが見られるようになり、第3世代はそれが一定程度、定着する。それは、「育児と就労の両立ができる仕事に就こうと思っていた（G3福岡F1）」の語りからも伺われる。しかし、これは性別役割分業を見直さないで、女性の賃金労働と家事労働の二重労働を前提にしたものである。また、進学や就労についての理解が進む中、「家庭科の宿題（裁縫）は母親がやるから代わりに勉強をしろと言われた（G3岐阜F1）」という発言も見られる。

第4世代では「うちの親は、私が大学受けたいなって言ったら、特に反対しなかった。仕事はずっとしたいと思っていた（G4埼玉F1）」や「高校時代に両親が共働きだったので妻には働いてほしいと思っていた（G4東京M1）」とより平等的な将来の家族像を描く者もいたが、「結婚退職した母が女性の人生コースのイメージだったので、高校時代、妻には仕事をやめてもらおうと考えていた（G4埼玉M3）」というように、高校時代までの考え方には生育家族の影響が強い。加えて、依然として「共働きだけど、母が家事を全部こなしていて、父は家事をしていなかった（G4群馬F1）」という家庭も見られた。

第5世代では「結婚や出産をしても仕事は続けたい。社会との接点を失いたくない（G5長野F1）」や、就職することを「普通の人生（G5香川F2）」と表現する語りにみられるように、女性でも生涯働き続けるイメージを持つ人が増加している。しかし、「ある程度は社会で頑張ってきたけど、（女性は）評価されるわけでもないし、私の居場所はやっぱり家庭なのかなと迷っている人が私の周りには多い（G5長野F1）」という語りで見られるように、依然として女性の就労が社会的に正当に評価されないという現実が示された。

考察

性教育体験をどう見るか

「性教育の記憶がないか、あいまい」という語りが全ての世代に見られたのは、「雨降り保健」に関する語りにあるように、主要受験科目ではない保健に対する学校の（ある生徒においても）低い評価、軽視によるものであったと考えられる。さらに性を公教育の中

に位置づけるということに対する抵抗感があったこと、また教員養成課程においても性教育が扱われておらず、現場の教師が印象に残るような性教育を行うことが困難であったことが推測される。

特に第2世代、第3世代の性教育は女子のみへの初経教育で、同世代の男子は積極的な性教育を受けていなかったことから、「風俗に連れて行って、男にしてやる」などの先輩の言説はかなり影響を与えていたと考えられる。これは、婚前交渉をめぐる第3世代の男子の発言にも反映している。第3世代の保健の教科書には、中学では性感染症の概要が、高校では避妊についての記述がなされるようになってきているが、これも多くの生徒は受けていないか、性教育として印象に残らないような授業であった可能性が高い。第3世代の「家庭一般」の教科書では「家族計画」や青年期以降の男女の節度ある行動を求める記述も見られるが、これも女子のみの履修であったため、性規範などに関する男女の認識のギャップは大きいものであったことが推測される。

しかし中学校まで、性教育に関連する内容がまともに示された教科書を使っていた第1世代および、1980年代後半のエイズパニック以後、性教育関連事項が充実していく第4世代、第5世代では、性教育体験の語りが見られている。特に、第4～5世代では男女共修で学んだという経験が印象的に語られている。第3世代末に行われた量的調査（日本性教育協会1983）でも、半数以上の高校生が「学校で性教育を受けたことがある」と答えている（男子55.2%女子75.5%）。

しかし前述の量的調査からは、学んだ事柄が性と生殖に関わる生理学的な内容に偏っており、生徒たちが本当に知りたがっている「異性との交際」や「愛とは何か」、「性が人生に与える意味」などについては教えられていないことが明らかになっている。

男女の関係性をめぐって

高校家庭科の教科書に記述されていた、男女の関係性や性規範は、当時の高校生に影響したのだろうか。まず第4世代までは男女別修であったことから、その影響は男女で異なっている（女子に対しては授業を受けたことによる影響、男子は授業を受けなかったことによる影響）。また、他国でも見られる女性の婚前交

渉に象徴されるような性行動に対する道徳的な言説、規範（例えば Kebede, Hilden, and Middelthon 2014 参照）は第1、第2世代が高校生の頃には、日本社会でも性行動を抑制するものとして存在していたと言える。

第1世代の教科書では「節度のある男女交際」や「一夫一婦の生活を守ることは、私たちの文化社会に課せられた義務」などの記述があり、第2世代では結婚は家庭の形成や子育てのためのものとなっている。民主的な家族の形成の前提にある個々の男女の結びつきの問題より、社会への義務や子育てが強調されている。この世代の語りのデータには、結婚を個人ではなく、家と家の結びつきと捉え、離婚も世間体が悪いからよくないと捉える者が少なからずあった。しかし、少数だが、離婚も十分なやむを得ない理由があればありうるという意見もあり、さらに、第2世代末の一人の対象者は、恋愛結婚にも言及している。このように、人々の価値観と教科書の記述は基本的に調和していたが、少数の人々は個人的な関係として、結婚や家族について考え始めていた。

第3～4世代の教科書では、妊娠、分娩の生理の記述が増加し、「家族計画」や青年期以降の男女の節度ある行動を求める記述も見られる。これは、10代の人工妊娠中絶数が1980年に19048件（厚生省統計1980）で、それまでの最高記録となったこととも関係がある。この世代の語りのデータでは、婚前交渉に対する男女の意見の違いが目立つようになり、女子の場合も、否定する理由は倫理的な抵抗感から、妊娠への恐怖、将来設計が狂うなどの個人的なものへと変化する。これは、家庭科で詳しく妊娠、分娩の生理などを学ぶことによって、その大変さが理解され、性行動が慎重になっている結果ともとれる。そういう意味では、教科書からの影響があるともいえる。しかし、同時に「テレビドラマの影響で婚前交渉もありかな」と思ったなどのメディアや、兄弟からの影響の強さも現れている。また、離婚に関しても、周囲に離婚した家族が増え、男女とも離婚後の生活の良し悪しでそれを判断するようになっている。

男女共修になった第5世代の教科書には、高校生に関心のある「青年期の愛と性」や多様な家族のあり方なども記述されるようになるが、語りのデータも高校生の性交を肯定する意見や結婚・家族観の多様化、将

来の離婚の予測など、教科書の情報とも重なる側面が出てくる。しかし、本稿では取り上げなかったが第4、第5世代の高校生は、性情報をテレビドラマだけではなく、アダルトビデオやインターネット等からも入手するようになっており、これだけでは、教科書からの影響がどれほどかは明らかでない。

全体的には、社会や家族等からの影響の方が大きいですが、女子のみ必修となった時期の女子には、性別教科であった家庭科教科書の伝える知識や情報は、性行動を抑制するという意味で、一定の影響を与えていたように見られる。

高校生の性役割観をめぐって

ジェンダー平等という点では、伝統的に女性が担ってきた家事・育児労働と賃金労働の問題をどのように捉えていたのかが重要である。したがって、高校の家庭科教科書ではその点をどのように伝えようとしていたか、また、第4世代までの女子高校生と第5世代の男女高校生には何らかの影響を与えたと思われるのについて明らかにする必要がある。

第1世代の教科書では、主婦として家庭を経営することを前提に書かれており、第2世代になると、女性の就労も一定程度、認めるが、就労にあたっては「子どもや他の家族をぎせいにしない」ことがあげられている。それは、「男女は人間としては平等であるが、性別からくる適職・使命は異なる」という性別役割分業を前提にしたものであった。語りのデータにも性役割を当然視する意見がある一方で、女性の賃金労働を肯定的に捉える語りが見られ、教科書の記述と重なっている。

第3世代の教科書では職業を持つ女性が「半数以上」という1973年の調査結果が紹介されている。しかし、同時に「家事労働は、主婦ひとりの自覚と努力だけでは能率化はできない」ので、家族による家事労働の分担が必要といった記述が表れる。依然として性別役割分業を前提とした家族の協力が強調されているが、女子のみ必修の家庭科では、それは建前でしかない。この基本線は第4世代にもあてはまる。「育児と就労の両立ができる仕事」を求める語りも、母親と娘だけが家事をすることへの不満の語りもこの時期の教科書が伝える内容と関係している。第5世代の教科書では、生活設計に関わる内容が増え、性別に関わらず

働くことがライフコースに入るようになり、語りにも反映されている。また家族を中心としたものから個人に重心をおくようになっていく。

以上のように、第2～4世代までの家庭科の教科書は時代の労働力政策に呼応して女子高校生に「仕事と家庭」の二重労働の遂行を伝えているが、これに重なる語りや教科書からの影響かどうかは明らかではない。ただ第5世代の教科書にある個人を重視した生活設計、ライフコースなどは語りから見て、この教科書の影響の可能性が考えられる。

本研究では、保健と家庭科教科書の内容と世代の語りを対応させて見たが、性教育に関する質問は保健科と対応した語りとなり、性規範や家族等は家庭科・教科書との関係では語られていなかった。これは生理学的な側面だけで捉えられてきた日本の性教育の現実を反映している。今後、ジェンダー・セクシュアリティ教育を充実させるためには、保健の教科書とともに家庭科の内容編成に注目する必要がある。さらに、性やセクシュアリティ、関係性に関する最近の概念や理解をより多く含んだ課題を組み入れる必要がある。

【注】

- 1) 調査の対象者を知人や友人などの繋がりを通じて条件に合った人を探す方法。
- 2) 被面接者の反応に対応して質問の内容、表現、順序などを変える面接法。ある方向性を保ちつつ、被面接者の語りに沿って情報を得ることができる利点がある。
- 3) 語りの部分には、対象者の世代、出身地名、性別、番号を付した。

本研究は、2013 - 15年度、日本学術振興会科学研究費基盤研究 (B)「<性>に関する教育の内容構成・教育課程とジェンダー平等意識・セクシュアリティ形成」(研究代表者：橋本紀子、課題番号 2528522) の援助によるものである。

なお、本稿は下記のタイトルで *Sex Education* 誌に投稿し、既に掲載されている論文の和文である。ただし、英文では字数制限のため削除した分も、これには一部分含まれている。

"School education and development of gender perspectives and sexuality in Japan" *Sex Education* 17 (4) :pp.386-398

【引用文献】

(日本語の文献はアルファベット順の位置で和文にした)
Chi Cheung Ruby Yang. 2016. "Are males and females

still portrayed stereotypically? Visual analyses of gender in two Hong Kong primary English Language textbook series." *Gender and Education* 28 NO 5, 674-692,

Dinkins, E. G. and Englert, P. 2015. "LGBTQ literature in middle school classrooms: possibilities for challenging heteronormative environments." *Sex Education* 15, No.4, 392-405.

Haavio-Mannila, E., O. Kontula, and A. Rotkirch. 2002. *Sexual Lifestyles in the Twentieth Century*. New York: Palgrave.

Hashimoto, N., H. Shinohara, M. Tashiro, S. Suzuki, H. Hirose, H. Ikeya, K. Ushitora, A. Komiya, M. Watanabe, T. Motegi and M. Morioka. 2012. "Sexuality education in junior high school in Japan." *Sex Education* 12, No.1, 25-46.

橋本紀子、茂木輝順、井上恵美子、森岡真梨、長香織、2013。「男女共学制が戦後の日本人のジェンダー平等意識に与えた影響に関する調査研究」『教育学研究室紀要—<教育とジェンダー>研究』10号、pp27-51. 女子栄養大学栄養学部教育学研究室発行
日本性教育協会編『青少年の性行動 (第2回)』小学館 1983

日本性教育協会編『「若者の性」白書第7回青少年の性行動全国調査報告』小学館 2013

Kebede, M.T., Per Kristian Hilden & Anne-Lise Middelthun. 2014. "Negotiated silence; the management of the self as a moral subject in young Ethiopian women's discourse about sexuality." *Sex Education*, 14, No.6, 666-678

北村邦夫『セックス嫌いな若者たち』メディアファクトリー新書 2011

文部科学省 2015：児童生徒課長通知「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」

文部科学省 2016：児童生徒課長通知「性同一性障害や性的指向・性自認に係る児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について」

Meyer, E. J., Taylor, C. and Peter, T. 2015. "Perspectives on gender and sexual diversity (GSD) -inclusive education: comparisons between gay/lesbian/bisexual and straight educators." *Sex Education* 15 No.3, 221-234

厚生省(当時) 1980：『優生保護統計』参照

茂木輝順「教科書分析・中学校保健体育科」『季刊セクシュアリティ』56号、pp.64-73、2012年4月、エイデル研究所

Thompson, P. 2000. *The Voice of the Past; Oral History* (Third Edition). Oxford: Oxford University Press.
鶴田敦子「性・ジェンダーと教科書：家庭科の教科書を中心に」『季刊セクシュアリティ』56号、pp.32-39、2012年4月、エイデル研究所 1